

温故知新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(65) 平成15年2月15日

中国の歴史書(その3)

『三国志』(K083/61)

日本で一般的に『三国志』と呼ばれ、小説や漫画、ゲームソフトの原作になっているのは『三国志演義』のことで、これは「小説三国志」というような意味です。14世紀中頃の元末明初、羅貫中(生没年不詳)が正史『三国志』をベースに民間芸能の世界で長らく語り伝えられてきた様々な講談三国志物語(説三分と称されました)を取り込んで作り上げた小説です。

正史『三国志』は、西晋の陳寿(233~297年)により撰述されたもので、後漢末期から曹氏の魏・孫氏の呉・劉氏の蜀の鼎立、そして263年蜀が魏に滅ぼされ、265年魏は司馬氏の晋に代われ、280年晋が呉を滅ぼし、天下統一に至る三国時代(220~280年)を扱っています。

『三国志』は全65巻で『魏書』30巻、『蜀書』15巻、『呉書』20巻からなっています。皇帝の伝記である「本紀」は『魏書』にのみあり、蜀の劉備や呉の孫権などは「列伝」で扱われています。また用語の使い分けなどにより、それぞれ微妙にランクづけがなされています。一例をあげると、魏の諸皇帝は“帝”と称されるのに対し、蜀の劉備は“先主”と呼ばれ、呉の孫権にいたってはただ“権”と呼ばれてにされています。

このような構成上の特色は、陳寿が三国の中で魏を正統王朝としたことによります。この事が後世の名分論者から強い批判を受けることになり、蜀を正統とする別著を生むことになります。劉備・関羽・張飛や諸葛亮を主人公とする『三国志演義』ができる素地がこのあたりにあると言ってよいでしょう。とはいえ、本書は名文をもって知られ、『史記』『漢書』『後漢書』とともに“前四史”と称されました。

『三国志』は『後漢書』よりも先に書かれ、かつ後漢滅亡のすぐ後に書かれたため、後漢末期の状況に関しては『後漢書』よりも正確に詳しく知ることができます。また、『三国志』魏書卷三十・東夷伝・倭人条、通称「魏志倭人伝」は、日本に関する最古のまとまった所伝として名高く、多くの人々をひきつけ数多の議論を巻き起こしています。

当館所蔵の『三国志』は、明の萬曆24(1597)年に作られた版木をはじめ数種類の版木を用い、18世紀末に重版されたもののようで、14冊からなり沼津中学校の蔵書印が押されています。

(参考文献)

『魏書 卷三十 東夷伝 倭人条』

『図解雑学 三国志』渡邊義浩(222.04/㊦)

『「正史」はいかに書かれてきたか』

竹内康浩(222.00/㊦)

『三国志曼荼羅』井波律子(222.04/㊦)